

藤田豊八と草創期敦煌學*

Toyohachi FUJITA and the Early Days of Dunhuang Studies

高田時雄

はじめに

藤田豊八の名は敦煌學史上にあまり顯れていないようだ。しかし初期敦煌學、とりわけ我が國の敦煌學がまさに勃興せんとする時に当たって、藤田が果たした役割は決して小さいものではなかった。草創期敦煌學の輝かしい成果である『慧超傳箋釋』を逸早く世に問うたことは言わずもがな、辛亥の變亂に際しては内藤湖南と提攜して羅振玉、王國維の東渡を實現させたことは、その後日本敦煌學が羅王二氏と京都の學人との緊密な提攜の上に發展したことを思えば、その貢獻は高く評價せねばならない。小文は、上記二點をめぐって藤田の果たした役割につき瞥見したいと思う。

一、一九〇九年のペリオ來燕

一九〇九年九月、新疆の調査を終えて一旦ハノイに歸っていたペリオが、フランスに歸る途次、北京で所獲寫本の尤品を中國の學者たちが見せたことが、敦煌學が生まれる直接の機縁をなしたことは定説となっており、近年中國の學界でもその詳細について考證がなされている¹。羅振玉も、董康、蔣黼、王仁俊など

*小文は日本學術振興會科學研究費基盤研究（C）「日本國內所藏敦煌寫本古寫眞の整理研究」（20K00379）による成果の一部である。

¹王冀青「伯希和 1909 年北京之行相關日期辨正」『敦煌學輯刊』2011 年第 4 期、139–144 頁；同「清宣統元年（1909 年）北京學界公宴伯希和事件再探討」『敦煌學輯刊』2014 年第 2 期、130–142 頁；同「伯希和 1909 年北京之行相關事件雜考」『敦煌學輯刊』2017 年第 4 期、167–176 頁；秦樺林「1909 年北京學界公宴伯希和事件補考」『浙江大學學報』（人文社會科學版）第 48 卷第 3 期（2018 年 5 月）、44–56 頁。

もに寫本を實見した一人であり、興奮冷めやらぬままそのニュースを内藤湖南ら日本の學者に通報した。内藤湖南はその情報に基づき、同年十一月十二日の大阪『朝日新聞』紙上に「敦煌石室の發見物」という記事を掲載した。その劈頭に「東京某氏の許へ頃日清國文部參議官羅振玉氏より達せし一報は學問界の耳目を聳動せしむるに足るべき大發見を齎せり」とある。神田喜一郎は「敦煌學五十年」でこの某氏を田中慶太郎の父親である田中治兵衛だとしているが²、きわめて疑わしい。當時北京に居た田中慶太郎が自分の父に報知することはありえても、羅振玉が學者でもない田中治兵衛に態々直接知らせて來るとするのも可笑しい話である。ところで『大阪朝日』のこの記事は、實は一日早く『東京朝日』にも掲載されており³、そこでは「東京某氏の許へ」が、「都下の古書蒐藏を以て名ある某氏の許へ」となっているのが注意される⁴。ここに云う東京の某氏というのは、恐らく藤田豊八であろうと筆者は考える。藤田は明治三十年（1897）以來、上海、廣東において羅と活動を共にし、肝膽相照らす仲であったことはよく知られている。藤田は明治三十八年（1905）から蘇州師範學堂の總教習を勤めていたが、明治四十二年二月期満ちて辭任し、丁度この時期、日本に歸っていた。清國政府では藤田の蘇州勤務中の功績を表彰するために三等雙龍寶星を贈與せられることとなった。外務省外交史料館に、蘇州領事館から外務大臣小村壽太郎に宛てて發信された、勳章及び證明書（執照）の轉送依頼狀が残されている⁵。

「古書蒐藏を以て名ある」という表現が藤田に相應しいか否かといえ、筆者は充分にその資格を備えていると考える。藤田の略傳を書いた大學以來の友人小柳司氣太は「博士は書を藏すること、漢書約三千餘部三萬餘冊、洋書約三百部に及ぶ。…（中略）…博士の歿後、漢書は一括して東洋文庫に寄贈せられ、洋書は臺北帝國大學に購入せられて學界を益することゝなった」と言っている⁶。これは最晩年の藏書について言ったものだが、「略傳」には明治三十五年羅振玉と共に廣東に在ったとき、偶々有名な藏書家である孔氏嶽雪樓が售りに出され、「その一半は羅氏に歸し、他は多く博士鄴架のものとなる」とあって⁷、新聞記事の出た明治四十

²神田『敦煌學五十年』（1960年5月、東京：二玄社）、17頁。

³神田は又この記事が、十一月十二日の東京・大阪の兩朝日新聞に載ったと言っているが（上掲書14頁）、實際には一日のズレがある。

⁴『東京朝日新聞』明治42年11月11日、第5面。記事の後に「按ずるに敦煌は……」に始まる小字19行の注釋めいた一文が添えられているが、これは『大阪朝日』には見えない。

⁵「文學士藤田豊八ニ對スル清國勳章送付ノ件」（B18010142100）、蘇州の發信日は明治43年1月7日で、藤田はこの頃まだ日本に居たものと思われる。

⁶小柳司氣太「文學博士藤田豊八君略傳」『東西交渉史の研究（南海篇）』、東京：荻原星文館、昭和18年6月（初版は昭和7年、岡書院）、16-17頁。この「略傳」は『東方學』第63輯（昭和57年1月）の「先學を語る——藤田豊八博士」にも再録されている。

⁷同上、7-8頁。

二年の時点ですでに相當な藏書家であつたろうことが推測できる。さらに付け加えるならば、大阪府立圖書館が大正五年に藤田蒐集の清代詩文集三七五部を購入しているから⁸、その藏書は逝去以前にも他に譲渡されてたものがあり、相當に充實したものであつたことが分かる。羅振玉がペリオ所獲の敦煌寫卷についての情報をいち早く長年の知己たる藤田に報知したことは極めて自然なことであり、東京『朝日』で湖南が言う「古書蒐藏を以て名ある」という人物も藤田豊八を指すものとすれば理解し易い。

すでに周知のことながら、行文の都合上、以下に藤田と羅振玉との關係をかい摘んで述べておこう⁹。

藤田豊八は、明治三十年（1897）春、二十九歳の時に初めて渡清しているが、間もなく上海で羅振玉と相知り、羅を扶けてその農學報社のために農學書の繙譯に従事した。翌明治三十一年に羅氏が東文學社を起すと、復た教授としてその教壇に立ち、日本語を用いて中國學生の指導に當つた。王國維がこの時の藤田の學生であることはよく知られた事實である。王國維が藤田に宛てた書簡に「受業王國維」と署名していることによつても、これは證據だてられる¹⁰。この一兩年の協働によつて、藤田と羅振玉との交誼は非常な深まりを見せていた。明治三十五年（1902）、羅氏が兩廣總督岑春煊の招聘を受けて廣東に赴いた際にも、教育顧問として羅に同行した¹¹。同年末、留學生三十名を率いて歸國、それぞれ所期の學校に入學させた。明治三十八年（1905）、江蘇巡撫端方の招聘で蘇州に赴き、同地の尋常師範學堂の總教習となつた。蘇州に在ること四年餘、明治四十二年（1909）二月任期が満了し、日本に歸國した¹²。これについてはすでに上述した。丁度その頃、宣統元年（1909）閏二月、京師大學堂に分科大學が設置されることとなり、年來の友人羅振玉が農科大學の監督に任じられることとなつた。そこで羅振玉は藤田を農科の總教習として招請した。羅は學部の命を奉じ、この年五月から七月（舊曆）ま

⁸多治比郁夫「大阪府立圖書館物語 漢籍の蒐集」『大阪府立圖書館報なにわづ（難波津）』第32號（1967）、3頁。

⁹藤田の閱歷については、羅振玉撰の「大日本正五位勳四等臺北帝國大學教授藤田博士墓表」（昭和五年九月刊の『劍峰遺草』巻首に圖版として收める）があるが、簡略に過ぎる憾みがある。ここでも多くを小柳司氣太執筆の「略傳」に據つた。また『對支回顧録』（昭和11年4月、東京：東亞同文會内對支功勞者傳記編纂會）の「下巻」に見える「藤田豊八君」（768-771頁）も參考にした。

¹⁰注6に挙げた『東方學』の「先學を語る」に王國維が藤田に宛てた書簡の寫眞が掲載されている。いま東方學會編『東方學回想I』（先學を語る（1）、東京：刀水書房、2000年1月）に據れば、その221頁。

¹¹羅氏の「墓表」に曰く：予既與君交益深，故所至邀君偕。

¹²實際の歸國は五月半ばであつたらしい。大里浩秋「宗方小太郎日記，明治41～42年」『人文學研究所報』（神奈川大學）50號、明治42年5月14日條に「兩川藤次郎、藤田劍峯に名刺を留て歸る。此兩人本船にて歸國するを以てなり」とある（146頁）。

で農學調査のため日本に赴いているが、藤田にも會っているのに、藤田はこの時まだ北京に赴任していなかったことがわかる¹³。ペリオが北京にやって來たのは、羅振玉が日本から北京に歸ってすぐのことだったらしい¹⁴。藤田が正確に何時北京に赴任したかは分からないが、ペリオ北京滞在時の関連文獻に藤田の影は見えないから、ペリオが寫本を見せた時にはまだ北京には居なかったようだ。おそらくペリオと入れ違いに北京に赴任したものであろう。翌年の九月から十月にかけて、内藤湖南ら京都大學の五教官が學部に移送されたばかりの敦煌遺書を調査するため北京にやって來た。羅振玉等がペリオから聞いた情報として、石室にはまだ八千巻ほどが残っており、佛典が多いものの、早く北京に運ばないと残らず人に盗られてしまうと聞き¹⁵、急遽學部から北京移送の運びになったものである。敦煌遺書の北京移送を聞きつけた内藤等が早速それを調査するため出張してきたのであった¹⁶。この時には藤田も北京に居て、五教官とも面會している¹⁷。それから一年後の夏には、革命の足音が次第に近づき、時局も甚だ切迫してくるようになる。同年の十月十日（農曆では八月十九日）、武昌起義が勃發すると、北京でも人々の不安はいや増しに高まってきた。

二、藤田豊八の内藤湖南宛書簡

關西大學内藤文庫中に、辛亥年即ち明治四十四年（1911）の五月から九月にかけて、藤田豊八が内藤湖南に宛てた書簡が計四通見えている。革命騒ぎで物情騒然としはじめた頃で、羅振玉もいよいよ日本に避難する決意を固めかけていた。そ

¹³この時の羅の旅行日記が『扶桑再游記』で、それを見ると、藤田のほかにも、内藤、狩野、富岡、桑原など京都の學者たちの名が見えている。

¹⁴甘孺（羅繼粗）輯述『永豊郷人行年録（羅振玉年譜）』（1980年、江蘇人民出版社）の清宣統元年己酉（1909）條に「返京後、聞有法國大學教授伯希和者訪古我國西陲，於甘肅敦煌鳴沙山石室竊運所儲古卷軸大宗以去。……過京，賃宅蘇州胡同，其所得已先運歸國，尙有攜在行篋者。伯氏托其友爲介欲見鄉人」（37頁）とある。羅繼粗が編輯した『行年録』はほぼ羅振玉自述の『集蓼編』の文を編年體にしたものに過ぎないが、使用に便利のため、いまこれを用いる。

¹⁵上掲『永豊郷人行年録』に「伯氏爲言石室尙有卷軸約八千，以佛經爲多，曷早購致京師，否則將爲人篡取無遺」とある。

¹⁶拙文「明治四十三年（1910）京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第7卷、2004年1月、13-27頁を参照。

¹⁷富岡謙藏の日記に「〔明治四十三年九月〕九日（晴）一同藤田〔劍峯〕氏を訪問」とあって、その日付も分かる。内藤戊申「回顧と前進」『冊府』（復刊第8號）、11頁。ただここには日記のごく一部しか引かれていないから、他にも接觸の機會は多々あったであろうと推測される。事實、狩野直喜が北京での敦煌遺書調査を回想している所によれば、「その時に羅叔韞君は京師大學堂の農科大學長であり、前述の藤田博士もその下に教職に任ぜられて居ったので、遺書調査の爲至甚の便宜を與へて下さった」とあって、藤田が調査の援助をしていることが分かる。狩野直喜「王靜安君を憶ふ」『藝文』第18年第8號（1927年8月）、619頁。

のためにはどうしても日本での生活の方便を考えねばならない。羅氏は纏まった資金を得るため、所蔵書畫の賣却を考えていた。相前後して羅振玉所藏の書畫百點ほどを日本で展示するために借用の申し入れがあったが、具體的な話は進捗していなかった¹⁸。そこで藤田と湖南が協力に乗り出すことになった。北京に在っては藤田が萬事采配を振るい、待ち受ける京都では内藤湖南が賣り捌き方に頭を使っていた。實は、その少し前に、西本願寺の大谷光瑞伯からも北京本願寺の僧を通じて連絡があり、二樂莊を提供するので、日本に避難してはどうかという誘いがあったが、羅振玉は光瑞とは面識がないので躊躇していたところへ、京都の内藤等から誘いがあったので、藤田とも相談の上、これに應じることにしたのである¹⁹。この頃、大谷光瑞は第三次大谷隊の吉川小一郎が敦煌で經卷を得たという情報に接しており、羅振玉招聘には敦煌遺書の研究が念頭にあったものらしい²⁰。

ところで藤田と湖南は、前年の學部に於ける敦煌遺書調査で接觸していることは云うまでもないが、その出會いはもっと以前に溯る。湖南が最初に清國旅行を行った明治三十二年（1899）、二人はすでに上海で出會っており、そのことは湖南自身が「己亥鴻爪記略」中に記しているから間違いない²¹。さらに溯れば、藤田たちがやっていた雑誌『江湖文學』第二號（明治29年12月）に湖南が「支那の地勢と人文」という一文を載せているので、少なくともこの頃互いにその存在は知っていた可能性が高い。いずれにせよ彼等は相識の間柄であった。

この四通の書簡は基本的にすべて羅氏の書畫を日本へ運び、それを賣却する上での事務的連絡だが、これまで一向に注意されることがないので、以下にこれらを紹介したいと思う。最初の書簡の封筒中には、藤田の湖南宛書簡の外に、小村俊三郎及び羅振玉が藤田に宛てた書簡が同封されている。これらを甲乙丙として順次以下に掲げこととする（圖1、2、3）²²。

甲、藤田の湖南宛第一書簡

（冒頭の餘白）大箱二個 畫及洋書數部（うち二部は松本及榊兩氏へ御返却被下度候）漢畫少々（こは御預り置被下度候）。小箱一個（こは小生の書籍及雜物そのまま

¹⁸『永豐郷人行年録』42頁：「欲謀出京而長物累累行資無措，會日本友人有借所藏書畫百件赴東展覽者，擬售之充行資而久不得報。」

¹⁹『永豐郷人行年録』43頁：「感其厚意，方猶豫未有以應，而京都大學舊友内藤、狩野、富岡等亦來書勸駕，且言藏書可寄存大學圖書館，并即爲備寓舍。郷人乃商之藤田劍峰，時劍峰適在京。」

²⁰白須淨眞「大谷光瑞と羅振玉——京都における敦煌學の興隆と第3次大谷探檢隊」『草創期の敦煌學』（2002年12月、東京：知泉書館）、13-45頁。

²¹「己亥鴻爪記略」『内藤湖南全集』第6卷（東京：筑摩書房、1972年11月）、331、333頁。ちなみに湖南は下述の小村俊三郎とも、この旅行の北京滞在中に知り合っている（同上、329頁）。

²²内藤文庫湖南宛書簡8429號。宛先は「大日本京都岡崎町宮脇九十八／内藤虎次郎様親展」、差出人は「五月二十八日／北京西城後王爺廟／藤田豐八」、年は書かれていないが明治44年である。

御預り置被下度候)。かく三箱とせしは輸出免税單に三箱となし貫ひ候爲め已なくその數に充てしものにて何の意味も無之候。

拜啓、例の畫幅此國海關殊の外面倒にて已むなく小村君に依頼、公使館荷物として（表面上書物となり居候）貴大學宛御送申候。貴大學荷物などの係は何人に候や、預め御申入被下度候。若し日本税關にて（ただし或は神戸揚げ之上貴下宛御送申すやもはかられず候）兎や角申し候はば、受取方神戸西村内高橋峯太郎へ御托し被下度候。なほ別紙小村氏の手紙相添申候。（同氏のいふところは）少々杞憂かと存候が如何のものにや。若しかかる事情も有之候はば競賣期を秋にも延期ばし候ては如何、御高見如何にや（新聞などに清國某氏と出させては如何）可然御取計らひ被下度候。なほ羅氏及小生（小生の畫は國元より貴下宛送らせ可申候）畫單及價目同封送上仕候間御取捨願上候。

弟豊八頓首

湖南學兄侍者

再羅君より范寬桃源圖一幅（瀧氏の寫せしもの）貴下へ贈呈しられとの事に候得共過長の爲め箱中へ入兼候間今夏友人歸國の便に托し御寄送可申上候。

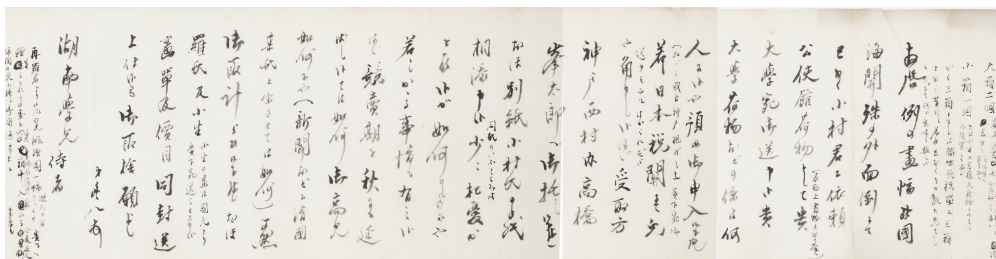


圖 1：藤田の湖南宛書簡

乙、小村俊三郎の藤田宛書簡

拜啓仕候。過日御依頼の一條延引今日に及び候處、別紙封入及御送付候間御查收被下度、神戸税關の方萬一故障申出候はば京都大學より證明書差出し候はば差支なき事と存し候。尤も通關證にも明かに賣買品に非らざる旨記載有之候次第に付品物片付に就ては可成丈内々に取扱はれ候方兩國官憲に對し必要かと存じ候。其旨京都へ御注意成置被下候様願度候。先は右要用のみ如此に御座候。敬具。

二十五日

小村俊三郎頓首

劍峯老臺侍者

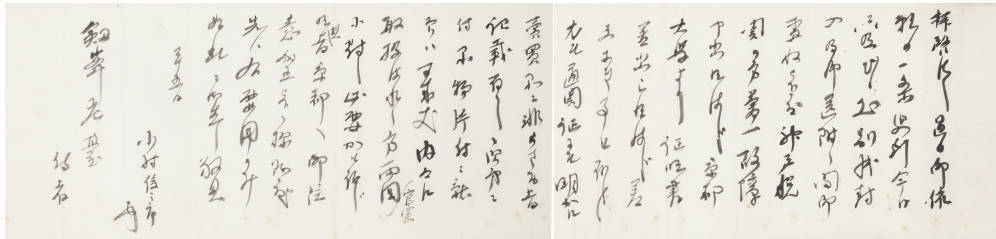


圖 2：小村俊三郎の藤田宛書簡

丙、羅振玉の藤田宛書簡

(前缺)

賜存爲荷。該卷值未能一一記住，第 意甲類之卷，自百元一幀至五百元一幀爲止，平均計之，一幀二百元，爲 [百] 三十三幀，此二萬六千六百元。乙類由三十元一幀至百元爲止，平均得每四十元，百六十七幀，此八千三百五十元，共三萬五千元。用費求在價內扣除一切費。

先生及內藤君之力，若得有成，則以此貿購般處之地，不復在長安飲江中矣。此請 道安。弟 振玉頓首。

劍鋒先生侍史

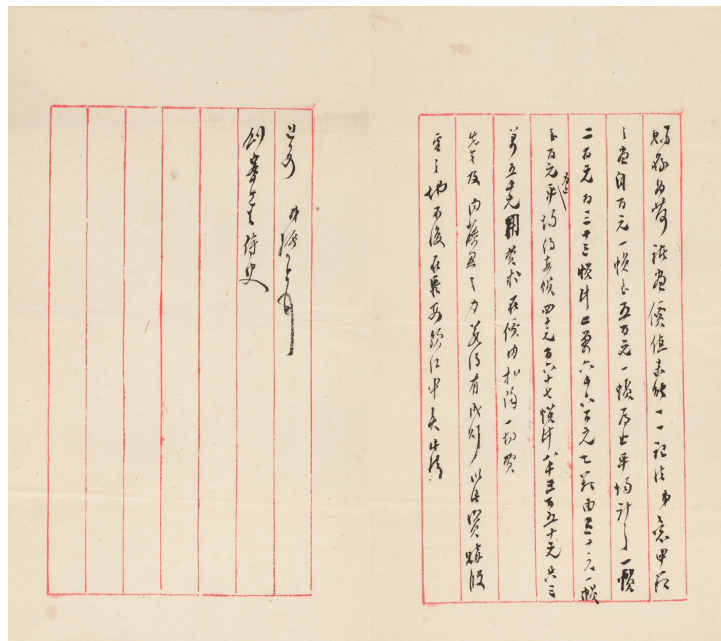


圖 3：羅振玉の藤田宛書簡

第一信の甲から見ると、羅氏の書畫は五月二十八日前後に京都大學宛に送り出されたことが窺える。中國側税關の手續の繁雜さを避けて、小村俊三郎に依頼して公使館荷物として送ることになった。小村俊三郎（1870-1933）は小村壽太郎の又従弟にあたる人物で、北京留學を経て、明治三十六年に外務通譯生、同三十九年には外務書記生として英國に赴任、四十二年に歸朝、この當時は北京公使館の二等通譯官であった²³。ここに掲げた乙書簡は、小村が藤田に宛てた注意書きである。藤田はそれを「杞憂」だと書いているが、外交官らしい細心な配慮である。小村は後、大正六年（1917）に一等通譯官を最後に官界を去り、東京日日新聞、次いで讀賣新聞で言論を事とし、晩年には對支文化事業にも參畫、昭和八年（1933）四月の逝去時には同調査會の委員であった²⁴。

丙の羅振玉の藤田宛書簡は前の部分が缺けている。何か私的な事柄が書いてあったかして、ここには書畫の件に關する部分だけが同封されたものと見える。羅振玉自身の見込額を甲類、乙類に分かって計算し、合計で約三萬五千元（實際の計算では三萬四千九百五十圓）、費用はここから差し引いて欲しいとある。ここで気になるのは、藤田の甲信に「羅氏及小生の畫單及價目」を同封したと云っていることだが、ここには含まれてない。これに就いてはあとで述べたい。

第二信は八月三日付けで、以下の通り（圖4）²⁵。

拜復、富岡君之誤解もとけ候由、御苦衷ただただ恐縮之外無之由、御示教之趣早速羅君へ相通申候處、賣却方法は如何やうとて兩兄にて御取計被下價格も三萬五千は大體之標準に有之、出入は固より免かれさるべく是亦た兩兄にて可然御計られ被下度しとのことにて候（小生も同様に御願申上候）

今回之事寔に御迷惑千萬とは存候得共御懇情に甘ゆるより外致方無之御推察被下度候。羅君も御依頼之字畫賣却之後は當分引込の積らしく保國の勢力目下の如くにては不得已義かとも存ぜられ候。例の張騫（嘗？）なども已に買收せられ居るものの如くかかる輩は他にも少なからざるやう見受けられ候。弟は羅君が無垢之志士として終始せんことを希ふもの、同君が字畫賣却もこの下心ありての事と存候。御下命の題識、同君目下中央教育會之拳匪に苦められ居候まま大に延引仕候得共近日起草之筈に候。

十七帖は有正書局石印の原本に相違無之本日小生手元まで持歸御送附

²³『對支回顧録』「下卷」に小傳「小村俊三郎君」がある（763-768頁）

²⁴外務省外交史料館檔案 H-1-4-0-1_1「委員小村俊三郎死亡ニ關スル件」。

²⁵内藤文庫資料、25 各種關係資料 5-111。發信地、宛先は第一信と同じ。明治 44 年 8 月 3 日。

方法勘考中に候。

當地も本年は淫雨連日昨今やうやく晴れ申候。暑氣はさまでにも無く候得共鬱陶しきには閉口仕候。

なほ繰返し書加へ候が價格は一切御相談には及ばず御見込にてよろしく候。

弟 豊八頓首 三日

湖南先生侍史

再、何紹基の字、中年のがよきか晩年のがよきか狩野兄に御尋被下度候。

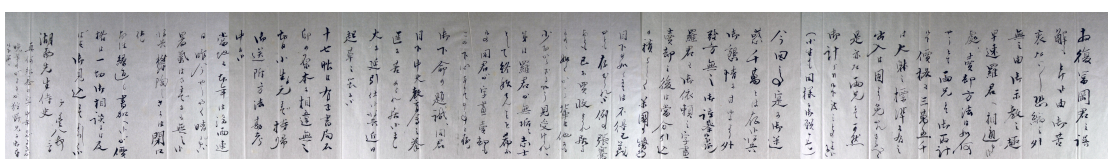


圖 4：藤田の湖南宛第二書簡

第二信は、内容から判断して、書畫が無事京都に着いたことを湖南が知らせてきたことに對する返信と思われる。富岡（謙藏）君の誤解というのが判然としなが、書畫の取引について何か行き違いがあったのかも知れない。末尾に十七帖に就いて觸れられているのが、目を引く。ほどなく上野理一に譲渡されることになる、姜宸英舊藏の王羲之「十七帖」はこの時まだ北京にあって、藤田の手許に置かれていた²⁶。藤田は上海有正書局の石印による影印本²⁷の原本に間違いないと云っている。羅振玉はこれを他の書畫とは別にして大切に扱っていたことが分かり、後でも觸れるがその賣却價格にはかなり神経質になっていた。

第三信は八月二十七日發（圖 5）²⁸。

拜啓、去日文科大學宛送呈之十七帖御查收被下候ひしことと存候。近藤氏に托送の畫幅御入手候や如何、御序之節御一報被下度候。甚だ勝手かましく候得共已經賣却之字畫至急御示知奉希候。小生所藏のものにも望み有之候や、少々金子入用之義も有之候間趁早賣却願上候。別封未入藏經目送上（例の敦煌のもの）松本氏之御意見御尋ね被下度候。

湖南先生侍者

弟 豊八頓首 二十七日

²⁶もう一點、羅振玉から上野理一に割愛されたことで有名な「聖教序」は、前年に湖南が日本で複製を作るため羅振玉から借りて歸り、すでに日本に在った。赤尾榮慶「上野コレクションと羅振玉」『草創期の敦煌學』、73 頁。

²⁷『唐拓十七帖』。現在では宋拓とされているが、當時は羅も湖南も「唐摹唐刻」と信じていた。

²⁸内藤文庫資料、25 各種關係資料 5-112。發信地、宛先は第一信と同じ。明治 44 年 8 月 27 日。

再、富岡兄より折返し手書あり、今は力及はず、字畫之件たいたい閣下の鼎力を仰ぐ外無之候。 豊八又拜

ここでも羅振玉の意を承けたものか、藤田は先ず「十七帖」が無事に着いたかどうかを尋ね、併せて送附した書畫の賣却状況を知らせて欲しいと頼んでいる。ところで、ここに「別封未入藏經目送上」とあるのは、敦煌學史上において些か重要である。これは李翊灼の『燉煌石室經卷中未入藏諸經目錄』のことを指している。1910年に敦煌に残置された經卷が北京に運ばれ、京都から五人の教官がその調査に赴いたことは上述した。これら大量の經卷は學部から京師圖書館に移交され整理が進められていたが、この頃早くもこの成果が現れた。藤田が（恐らく羅氏に代わって）湖南に送って寄越したもので、該目錄は今も内藤文庫に所藏されている²⁹。湖南は早速それを『藝文』誌上で紹介した³⁰。「松本文の意見」云々は、佛典については松本文三郎に委ねられていたからである。富岡謙藏の「今は力及ばず」というのは、もし上の誤解云々とも關係するなら、或いは富岡家で全部を引き取る意圖があったのかも知れない。

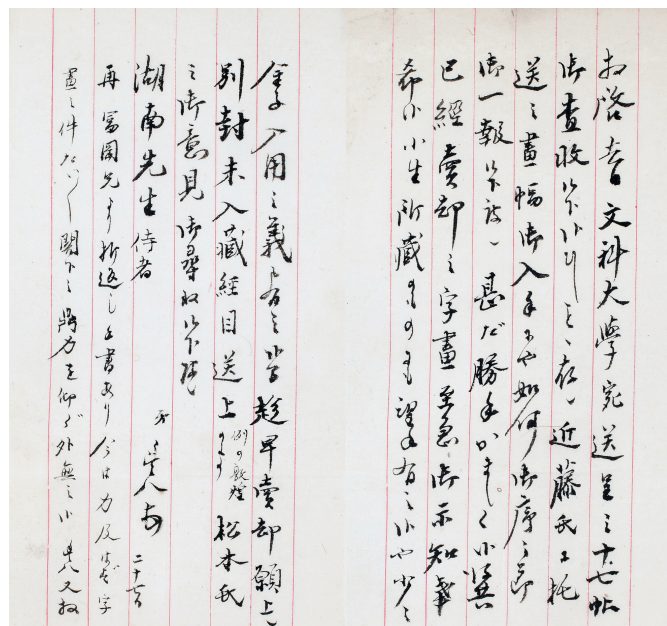


圖 5：藤田の湖南宛第三書簡

²⁹京師圖書館の用箋を用いた鈔本、9葉。内藤文庫 L21**1*947。該目は民國元年（1912）、鄧實の『古學彙刊』第三編（上海國粹學報社排印本）に收めて刊行されたが、李翊灼本人の修訂本を用いたらしく、體裁排列ともかなり相違がある。注目されるのは末尾の「景教經」の項に加えられた鄧實の案語で、次のようにある：「今秋晤法人歐盧梭君（Léonard Aurrousseau, 1888–1929）於滬，出厝法人伯希和氏所譯此經，據云此爲摩尼教經而決非景教，謹附識于此，鄧實記。」

³⁰『藝文』第2年第10號（1911年10月）「彙報：敦煌發掘の佚經」、114–119頁。

次いで九月十二日付けの第四書簡（圖6）³¹

此地に大駕を迎へしは恰も去年の今頃に候ひき。客窓特に日景の速を
覚え申候。御好の焼栗も昨今上市何れそのうち御贈可申上候。去日營
口電報にて御依頼申上候件已に御取計らひ被下候ひし事と存候。なほ
別紙羅信送呈御一瞥被下度候。富岡兄辭職一件その後如何、矢野氏貴
大學へ就任の由聞及び候ひしに、又々來燕。學部圖書館の元史抄本、印
本と異ならざる由、柯君の談に候。遼史、金史は商務印書館にて石印
に附せんかなどの噂有之候得共如何にや。ペリオ帶去の燉煌遺書、西
人間に偽物との噂ある由（張元濟西遊、シャバンヌに面せしときの談）、御一
笑。圖書館買上價值僅に一萬フランとは廉に候はずや。ペリオ氏は多
分一二千元にて購ひしならむか、可惜々々、匆々。弟 豐八頓首
湖南學兄侍者 九月十二日

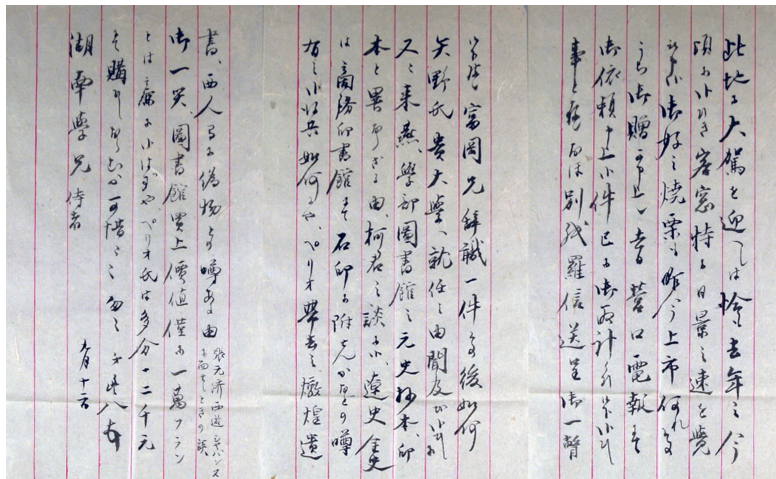


圖6：藤田の湖南宛第四書簡

この書簡では、處分も一段落したからであろうか、書畫にはほとんど觸れられていない。唯一、「別紙羅信送呈御一瞥被下度候」とあるのが、若干それに關係しているの、それについて少し付け加えておこう。實はこの書信には羅振玉の藤田宛書簡が一葉添えられていて、そこに「十七帖價能否求致書内藤博士、于下月初旬匯到以濟急需最感」と見え、上述の「十七帖」についてその賣却結果を氣に掛けている様子がわかる³²。矢野仁一の人事については、ここでは關係ないので觸れな

³¹内藤文庫資料、25 各種關係資料 5-113。發信地、宛先は第一信と同じ。明治44年9月12日。

³²この羅書簡もここに出しておくべきであったが、幾つか文字の讀めない箇所があり、別の機會を期したい。

いが、面白いのはペリオ寫本に關する張元濟の情報である。偽物の噂があること、圖書館が購入した價格が一萬フランで、ペリオが敦煌で買った金額はたぶん一二千元だろうなど、話の正確さは兎も角、面白い情報と云えよう。張元濟は1910年3月17日（二月初七日）に上海を解纜、英、獨、佛などヨーロッパ諸國を回り、更にアメリカ、日本を経て、翌1911年1月18日（十二月十八日）に上海に戻ったが³³、その間、フランスではシャヴァンヌ等中國學者に面會している。フランス國立圖書館を訪れた際には、公使館の紹介で特別の許可を得、ペリオも同行してペリオ所獲寫本を見せてもらっているが、とても満足な調査は出来なかったようだ³⁴。

以上、藤田の湖南宛書簡四通を簡単に紹介した。次に京都に運ばれた書畫がどのように處分されたかである。

三、書畫の目録、展示と賣却

さて、上で藤田の湖南宛第一書簡中に「羅氏及小生の畫單及價目」を同封したと書いてあることに言及した。藤田自身の「畫單」は兎も角として、羅振玉のものは何處へ行ったのであろうか。實はそれとらしいものがやはり内藤文庫の中に保存されている。それは「羅振玉先生書畫賣立目録」と書かれた封筒に入った一件書類中に見える³⁵。ここに保存された目録乃至リストはすべて羅氏の書畫賣却に關するものなので、一應その中味を全部見ておきたい。小文は書畫の内容を檢討することが目的ではないので、それには細かく立ち入らない。

1. 「三百件内售出清單」表紙、裏表紙共八葉の罫紙を綴じた冊子。

末尾に以下のような記載がある：「以上共售出一百二十八幅，内除姜宸英退回重售實售出一百二十七幅。總共售價二萬九千五百二十元。内除去已退回之姜宸英書幅價六十元，淨得二萬九千四百六十元。内除八折（手數料二割）³⁶淨收二萬三千五百六十八元。」

2. 「明治四十四年七月十五日京都市立繪畫專門學校展觀清國羅振玉氏藏書畫目録」十葉の冊子。

書之部と畫之部に分かつてあり、各項の頭に明、清など朝代を書き加えてある。

³³ 葉新「遠游歐美，心繫館務——從1910年張元濟環游之旅中的一封信談起」『出版與印刷』2018年第3期、62-66頁。

³⁴ 『張元濟年譜』（北京：商務印書館、1991年12月）の1910年10月26日（九月二十四日）條には、1911年3月23日付汪康年宛書簡を引き、「重房密屋，光線甚乏，而伯君又匆匆欲行，故只能略觀大概」とある。

³⁵ 内藤文庫資料、13 湖南以外の原稿260。

³⁶ 「八折」を抹消して、日本語で「手數料二割」と書き直してある。

また部分的に題名の下にアラビア数字（時に赤鉛筆の漢数字）で金額を書き込んである。筆蹟から判断して、この目録は湖南による覺書か。

3. 「手帖の切れ端」一葉（表裏に文字あり）

「一、姜宸英書冊 60」から「十七、鄭板橋墨蘭 250」まで、湖南の筆蹟。アラビア数字で注記された金額は他のリストと一致する。

4. 「記」と書かれた一葉。「南唐拓本澄清堂帖 二千元」に始まり、「宋拓十七帖殘本 唐鷓安藏 一百五十元」まで十三種の拓本を列挙する。別にこれに續くと思われる紙片があって、以下の三行が見える：「宋拓曹娥碑 毛意香跋 一百五十元 / 宋拓爭座位帖 臨川李公博藏 一百五十元 / 以上宋拓本十五種九千元。全購特價計七千九百元 / [] 三百元」

5. 「明拓夏承碑 朱竹君藏 二百五十元」から「明拓甲秀堂帖 曹米朵藏 一百元」まで明拓本を列挙する。三葉を綴じたもの。明らかに羅振玉の筆蹟。末尾に「以上明拓本四十七種全購特價五千元。碑帖全購特價一萬四千元」とあるのは、上記4の宋拓本との合算であろうか。とすると宋拓本十五種を全部購入すれば七千九百元の特價というのと計算上やや矛盾するが、それは今問わないことにしよう。最終葉に以下の語有り：「拙藏宋拓明拓悉在此目中。其他所存難得之品，惟有清碑數十種，然皆國初及乾嘉拓本，在拙邦價格太昂，恐貴國人以爲一二百年間拓本價太高，故未列入」。

6. 「舊拓清碑」として十三種を掲げ、最後に「全售價特收一千八百元」とある。一葉。これが上に云う「清碑數十種」に当たるはずだが、実際には十三種しかない。最後に朱字の別筆で、「香川縣木田郡氷上村 大西行禮」「古印 四三四二」とある。大西行禮は有名な收藏家で、連絡のためのメモの類か³⁷。

7. 「書畫簿記」表紙とも十二葉の冊子。甲類、乙類に分かって、書畫目を列挙する。甲類末には「甲類共一百卅三件」とあり、「乙箱」は「乙類共一百六十七件」とある。少なくとも甲類部分は羅振玉の筆蹟である。

藤田の湖南宛第一書簡に云う羅氏の「畫單及價目」とは、7の「書畫簿記」がそれではあるまいかと思う。このリストは前半の甲類が間違いなく羅振玉の筆蹟だが、後半はあまり癖のない楷書で書かれている。ただ最後の部分になると例の羅振玉特有の字になる。あるいは全部羅振玉の書いたものかも知れない。とすれば

³⁷大西行禮は羅振玉から「宋拓甲秀堂帖 董其昌跋 孤本 一 [千] 五百元」（4のリスト「記」の三番目に見えるもので、リスト5の初めに掲げる明拓甲秀堂帖とは異なる）を購入している。この碑帖は翌年（1912）四月に博文堂から『宋拓甲秀堂帖』として影印本が刊行された。

藤田が第一書簡に封入したのはこのリストだということになるろう。1について云えば、楷正な書體で丁寧書かれており、「售出清單」とあることから賣却の結果を書き記したものと考えられる。筆者が誰かということになると、賣却に立ち會った人物でなければならず、また末尾の集計記載も中國式に書かれていることから、筆者は藤田のような氣がするが、藤田の筆蹟を判定する材料を持ち合わせないので、確言は出来ない。ともあれ藤田は羅氏東渡の直前に日本に歸っているので、賣立に立ち會った可能性は充分にある³⁸。いずれにせよリスト7は甲類133件、乙類167件であり、またリスト1は「三百件」と稱しており、甲乙の合算として兩者符合する。更に藤田第一書簡に同封された羅振玉の藤田に宛てた賣却見込みの數とも一致し、これが當初賣却を豫定した羅氏所藏書畫そのものであると結論できる。それ以外に4、5、6から分かるのは、羅振玉が碑帖の類も賣却していることが分かるが、これらは恐らく羅氏自身が持ってきたものであろう。

以上のリストのうちで、表題からその性格が明らかなのは2の「明治四十四年七月十五日京都市立繪畫專門學校展觀清國羅振玉氏藏書畫目錄」である。五月末に北京から京都に運ばれた羅振玉の書畫は、まず七月十五日に京都繪畫學校で展覽會に出陳された。もちろん賣却を前提にした展覽會で、いわゆる展示即賣會である。即賣會では一百二十七幅が賣れ、二割の手數料を差し引いても二萬九千四百六十元の賣上げがあった。この展覽會に出陳された書畫の品目は計132點であつたらしい³⁹。

明治四十三年に京大教官五名が敦煌遺書調査の爲めに北京に赴いた折、國華社主幹で京大の講師でもあつた瀧精一が北京に居合わせ、繪畫など美術史方面の調査にはしばしば湖南と行を共にした。したがって羅振玉の所藏書畫も數多く寓目したほか、寫しも作つたらしい。藤田の湖南宛第一書簡に「羅君より范寬桃源圖一幅（瀧氏の寫せしもの）貴下へ贈呈」とある。その瀧精一が、京都繪畫學校での展覽會のあと、九月十日に東京國華社の主催で支那畫の展覽を行っている⁴⁰。新聞記事に擧げられた繪畫を見ると、「李唐筆田家嫁聚圖」、「惲南田花塢夕陽圖」、「沈石田風樹圖」、「董邦達山水」などすべて京都繪畫學校で展示されたものである。記事に據れば、「因に瀧氏は該出品を京都大學に返附の爲十三日頃京阪地方へ赴く由」

³⁸ 『永豐郷人行年録』43頁：「[十月]七月（日）乃達神戸，劍峰等已在彼相逐。」「七月」は「七日」の誤植、『集蓼編』により改める。十月七日はもちろん舊曆で、新曆では11月27日。

³⁹ 古川文子「野崎家コレクションの中國書畫にみる近代の交流」『文化共生學研究』（岡山大學大學院社會文化科學研究科）第17號（2018年3月）、3-18頁。そのうちの12-15頁に見える表2「羅振玉收藏『支那畫展』陳列品目錄」による。ちなみにこの目錄は芸艸堂刊行の雑誌『美』第3巻第2號の「藝術界彙報」により作成したとある。この表には、一部現在の所藏者も書き込んであつて便利である。

⁴⁰ 『東京朝日』1911年9月11日朝刊。

とあるから、臨時に東京へ借りだしたものであろう。京都の即賣會ですでに買い手が付いていたとすれば、急いで持歸る必要があったことは想像に難くない。

京都の即賣會のみならず、これら書畫の賣買には、恐らく湖南の紹介で博文堂が肝煎りをしたものと推測される⁴¹。顧客を探すのには京都大學の同僚たちも出来る限り協力してくれた。桑原隲藏が郷里の富豪大和田氏に書畫の購入を懇請していたことを裏づける書簡が残されているので、ここにそれを紹介しよう。明治四十五年一月の油谷博文堂宛書簡である⁴²。

拜啓、新年は早々御叮嚀にも御年賀に預り難有奉存候。小生歸郷中とて失禮申候。又手かねて内藤氏より内談有之ことと察し候が小生歸郷之節故里の富豪大和田氏に羅振玉氏の書畫購入を懇請いたし續いて歸洛後内藤氏より受取りし書畫目錄送附いたし置きし所、本日大和田氏より返信到來仕り、同氏は要路有之東京北海道へ旅行準備中にて自身出坂いたし兼ねるも親戚の山本氏を代理として一兩日中に出坂せしめ貴鋪に就いて親しく羅氏の書畫を一覽せしむべき旨申越し候につき左様御承知有之度候。右山本氏參堂之節は成るべく便宜を與へらるる様小生より特に注意申上置き候。不取敢右得貴意如斯に御座候。委細は他日拜覽之時を期し候。匆々

一月十八日 桑原隲藏

油谷博文堂主人殿

仇英陸治合作美人幅

陸治雪山圖幅

陳眉公瀟湘景圖

其他三四購求を懇請いたし置き候につき爲念申添へ候。

小生懇請以外の幅幀をも一覽せしめられたく候。

桑原が大和田氏に勧めた三點はうまく購入できたであろうか。「陸治雪山圖幅」と「陳眉公瀟湘景圖」は展覽會の目錄には見えているが、リスト1「售出目錄」や湖南の展覽會目錄（リスト2）には現れていないから、賣れ残っていたらしい。ただ「仇英陸治合作美人幅」は湖南のリスト2には「仇英陸治合作美人雙陸圖幅」とし

⁴¹ 羅氏所藏書畫の尤品は賣却の後も、博文堂は所藏者の許諾を得てコロタイプで複製を作り頒布した。こういったことも湖南の企畫であったに違いない。これらには大抵羅氏の跋が附されており、當然博文堂から潤筆料が支拂われたであろうから、なにがしかの収入にはなったのである。

⁴² 明治45年1月18日付、大阪西區靱上通り二丁目油谷博文堂主人宛の至急親展便。2020年10月27日～11月1日に開催された「博文堂近代中日名人藏家尺牘文獻展」（東京中央オークション京都市京セラ美術館特展）に展示されたもので、偶然筆者の眼に入ったもの。

て載せてあって、600 という価格が記入されている⁴³。すでに賣れてしまっていたとすれば、大和田氏は買えなかったであろう。

四、慧超傳箋釋

藤田の初期敦煌學における實質的貢獻は何と云っても『慧超傳箋釋』の公刊であろう。慧超の『往五天竺國傳』はペリオ所獲寫本の一で、現在 P3532 の編號によってフランス國立圖書館に保管されている。首尾が殘缺しており、すぐには如何なる文獻であるか分からないが、ペリオは藏經洞でこの寫本を手にするや、これが新羅の求法僧慧超の旅行記に外ならないことを見出した。彼は 1908 年 3 月 23 日の日記に次のように記している⁴⁴。

最後にそして最も重要なものとして、私は求法僧の新たな記録を發見した！ 首尾ともに缺けているが、インドとくにロシア・トルキスタン、カシュガル、クチャにとっては極めて重要なものだ。この無名の作者は開元 15 年 11 月（727 年末）に、安西すなわちクチャに到着した。自分はこの人物は惠超だと思ふ。彼の『往五天竺國傳』は大藏經中で短い注釋の對象となっている。その注釋では崑崙や謝颺を取り上げているが、この寫本にもこの二つの名が見えるのである。そしてザブリスタンを示す謝颺の語は、『唐書』によって、則天武後の即位以後にしか用いられないことを知る。つまりほぼ 700 年以降である。

ペリオは慧琳『一切經音義』卷第百に載せる本書の短い音義の字句を記憶していて、これが慧超の書であることを見抜いたのであった。

ペリオはこの文獻の重要性に鑑み、北京にも攜行していたので、羅振玉等はこれを目にすることが出来た。羅は早速これを『敦煌石室遺書』中に取り上げ、その録文と「校録札記」とを公刊した。録文の標題「慧超往五天竺國傳殘卷」に「據

⁴³リスト 1「售出目錄」に「仇英美人」とあるのがこれに當たるものか否か、判断がつかない。價も五百円で少しく異なる。

⁴⁴Paul Pelliot, *Carnets de route, 1906-1908*, Paris: Les Indes savantes, 2008, p.290. 耿昇による漢譯『伯希和西域探檢日記 1906-1908』、北京：中國藏學出版社、2014 年 8 月、499 頁。もっともペリオは『慧超傳』發見に關する概報を『極東學院學報』（BEFEO）1908 年第 3-4 號に載せており、そこでは「この一文はペリオ氏が學士院會員スナール氏に宛てた書簡の拔萃である」と注記されている。つまり現地で書いた書簡ということになる。その『慧超傳』に關する記述は日記よりもかなり精しい。Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou. 該當ページは 511-512 頁。因みに神田喜一郎はこの雑誌の刊行は實際にはかなり後であると推測しているが、たぶんその通りであろう。神田『敦煌學五十年』7-8 頁。

『慧琳一切經音義卷一百本傳音義加書題』と注記してあるのは必ずやペリオの指摘を踏まえたものであろう。藤田はペリオが去った後に北京に赴任し、羅氏による録文を見て考證を行ったのだが、その成果は翌年八月（舊曆）には北京で印刷刊行されている（圖7）⁴⁵。前言の日付が「明治四十三年三月」となっているから、半年ほどで書き上げたことになる。『慧超傳』の翻譯や研究は今日に至るまで少くないが⁴⁶、藤田のこの著作がその先驅けとなったものである。



圖7：『慧超往五天竺國傳』の卷首 初版本（右）と再版本（左）

『箋釋』は一々羅氏の「札記」を引きつつ、史書や碑銘などの関連資料を博搜しつつ對音を考えるなど、甚だ詳細である。時には一條が數葉に及ぶこともある。後に東西交渉史の専門家として縦横に論陣を張った藤田の面目躍如たるものがある。

ところで同書の出版後、同年の十一月頃から中國東北地方で發生したペスト（鼠疫）が北中國にも蔓延し、半年の間に數萬人の犠牲者を出すということがあった⁴⁷。藤田はその疫病を避けて、日本に一時歸國している。この時、藤田は東京で再版本（圖7）を刊行すべく、『箋釋』に大幅な改訂を施した。前言も、主旨は同一であるものの、かなり措辭を改めている。初版本で、『慧琳音義』『慧超傳上卷』の地

⁴⁵圖に見るように、初版本には封面裏に「庚戌八月校印」とあって、刊行年月を知り得るが、再版本にはそれを缺いていて、明確な刊行年月を知り得ない。

⁴⁶いま一々それらを羅列することはしないが、近年の研究には大抵これまでの重要な著作が挙げられているから、それをご覽いただきたい。ちなみに筆者はかつて本書の敦煌寫本が一種の草稿本であるとの説を提出したことがある。桑山昇進編『慧超往五天竺國傳研究』（京都大學人文科學研究所研究報告、1992）附論1, 197-212頁。

⁴⁷曹晶晶「1910年東北鼠疫的發生及蔓延」『東北史地』2007年第1期、64-68頁を参照。

名を引き、「慧超入竺、蓋由海道、上半雖殘、據慧琳音義、尙班班可考也」とあった部分は刪去されている。再版本の前言は文末に「明治四十四年春、徳島藤田豊八箋證竝題記」としてあり、明治四十四年（1911）に刊行されたかのように見えるが、再版本末尾の附録⁴⁸には「明治四十五年春稿」と明記してあるから、実際の刊行は明治四十五年であったようだ。

藤田は東京で再訂を行った後、上海を經由してふたたび北京に戻った⁴⁹。北京に歸って數ヶ月、上述したように革命の影響が次第に北京にも及びはじめ、羅振玉の避難東渡に至るのである。

藤田の『慧超傳箋釋』は再版本が、昭和六年（1931）に高楠順次郎の考訂を経て『大日本佛教全書』の「遊方傳叢書」中に收められているが、初版本については、今日必ずしも容易く見ることが出来ないようである。筆者は兩者の異同表を作成しかけたのだが、作業が相當に繁雜であり、今回は収録し得なかった。またの機会を待ちたいと思う。

おわりに

藤田豊八は『慧超傳箋釋』を刊行後、いわゆる敦煌文献の研究に繼續して手を染めることはなかった。羅氏の東渡とほぼ同時に歸國した後、藤田の興味は集中して東西交渉史に向けられ、『東洋學報』や『史學雜誌』、『藝文』などに陸續として雄篇を公けにした。それらは後に『東西交渉史の研究（南海篇）』、『東西交渉史の研究（西域篇）』の二巨冊として世に現れた。三高以來の友人であった笹川臨風は「後年の藤田君は全く學者となり、文章家の劍峰とうって變ったものとなった」と評しているが⁵⁰、それは『慧超傳箋釋』の刊行が契機となっているように見える。羅振玉を通じた敦煌寫本との接觸が藤田をして學究の生活に入らしめたとも出来る。いずれにせよ草創期敦煌學の形成に大きく貢獻したことは紛れもない事實であって、敦煌學史においても藤田豊八はもっと評價されて然るべきと考える。

（作者は京都大學名譽教授）

⁴⁸附録（91～97葉）は、小勃律國、劫國、蒲特山、活國の四地名についての考證である。因みに中國國內で最も流布する民國二十年の錢稻孫泉壽東文書藏本にはこの附録を欠いている。

⁴⁹上にも引いた「宗方小太郎日記」の明治44年（1911）2月6日條に「夜藤田劍峯を訪ふ」とあるが、宗方はこの時上海に居たので、藤田もこの頃上海に暫く滞在していたのであろう。大里浩秋「宗方小太郎日記、明治43～44年」『人文學研究所報』52號（2014年8月）、199頁。

⁵⁰笹川臨風「追憶」『東西交渉史の研究（南海篇）』、19-21頁。